

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.203

ISSN 2432-5295

特集「ぶらり」

C O N T E N T S

- ◆特集：【ぶらり】・・・01
 - ・ほっこりとドキドキが共存する京都の路地歩き・・・02
 - ・全国でも珍しい「ノーカーゾーン」のひろがるまち・・・03
 - ・「草津川跡地公園」と公園内の集客施設「草津コクリバ」がオープンしました・・・04
- ◆今、こんな仕事しています・・・05～08
- ◆地域に寄り添って地方創生を考える・・・08
- ◆新人紹介・・・09
- ◆近況&イベントのお知らせ・・・10
- ◆まちかど・・・裏表紙
 - ・向島城の痕跡をさがす

(写真) 日本海を泳ぐこいのぼり
兵庫県香美町鑑漁港／撮影：中村孝子

特集 「ぶらり」

かつて移動時間は短いほどよいとされた時代がありました。その時代(今もですが)高速道路網が整備され、鉄道のスピードアップが進められてきました。

そして、価値観が多様化したと言われる今、移動時間は必ずしも短いだけがよいとは限らなくなりました。

移動の過程や移動そのものを楽しむ価値観も広まってきたのではないのでしょうか。

色々な意味で「歩くこと」の価値も見直されるようになりました。

「歩くこと」は人の速度で移動すること。

時には思いもよらない発見もあります。

スティーブ・ジョブズは "Life is random." と言いました。

「人生は偶然に満ちている、すべてを偶然に任せよう、」と。

時には「ぶらり」と出かけてみませんか。

感性を研ぎ澄まして。

そして、何より目的意識を希薄にすることです。

きっとそこには素敵な偶然の出会いがあることでしょう。

編集委員会

ほっこりとドキドキが

共存する京都の路地歩き

今、京都では路地に改めて注目が集まっています。

京都というと、表通りにりっぴな京町家が連続する町並みを思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。実際、京都の都心部は建物が碁盤目状の通りに面することとを前提に作られており、街割りの真ん中（あんこ）の部分は余地・

残地でした。この様な余地に住まいを築き、さらにアプローチのた



多数のアーティストの活動・暮らしの場として有名な「あじき路地」
共同井戸や地蔵など路地アイテムも路地歩きの醍醐味

です。地域により路地が出来た経緯は様々なようですが、かつて都会に惹かれ集まった人々が、残された土地で如何に豊かな暮らしの基盤を築くかを摸索する中で、路地は生まれてきたといえます。

そんな京都の路地の魅力とは何なのでしょ

■路地を覗いてみる

ある路地に足を踏み入れてみました。観光客で賑わう表通りとはうってかわり、落ち着いた空気が漂います。しかし、その落ち着きは決して整然とした一定の規則性によるものではありません。路地の端に目をやると、自動車の駐車スペースや園芸を楽しむ庭がない代わりに、軒下に自転車や鉢植えが置かれています。どちらかというと雑多な印象を受ける路地の「落ち着き」は、それぞれのライフスタイルにフィットするよう、住まい手が限られた空間を使いこなし、安定した住まい方の答えを出している様から醸されるものなのでしょう

住まいから漂う香りから「今夜の夕飯は何かな」などと想像

しながら歩くなど。路地独特の「落ち着き」を堪能しつつ、奥に進んでいくと、あるときふと、背筋が伸びる瞬間が訪れます。どこか、人に見られている気分になり、コソコソと振る舞っているのはマズいような気がするのです。そう、路地は住まい手が共有するアプローチ空間であり、本来、住まい手しか利用しない、共用庭のようなセミパブリックスペースであることに気付いたとき、どこか「申し訳なさ」がこみ上げるのです。

路地のまち歩きは、暮らしの表出から感じられる「ほっこり」と、ひとのプライベートを侵しているような「ドキドキ」の共存が癖になります。この「ほっこり」と「ドキドキ」のバランスは、路地の行き止り・通り抜けの違い、幅員や延長によって様々です。このような微妙な差異を比べながら、京都の路地を巡るのはいかがでしょうか？

■路地ライフを妄想する

先に書いたのは少し偏った路地の楽しみ方ですが、他にも路地は自動車が進入してこず、安心できる子育て環境があることや、熱心なコミュニティ活動など、多面的な評価がなされています。特に不動産物件としての手頃さもその一

つで、近年では、若者が住まいや事業を始める物件として路地の建物を求めるようになってきているようです。路地の建物の改修を手がける事業者も増え、現在の暮らしに合った住まいや路地の雰囲気を活かした店舗、アーティストの活動スペース等としてのリノベーションがなされた物件も散見されます。路地は現在においても、京都の魅力に惹かれた人々を受け止める寛容さを備えているということでしょうか。「私も路地に住まうとしたら：お店を出すとしたら：」などと妄想しながら、ぶらりとするのも一つの路地の楽しみ方かもしれません。

現在、アルパックでは、京都の路地の魅力を伝え、路地に住まう際の手引きとなる「路地保全・再生デザインガイドブック」（今年度中の発行を予定）の作成をお手伝いしています。ご関心のある方は、是非、一度手に取って頂けたらと思います。



トンネル路地の「ドキドキ」は格別

全国でも珍しい 「ノーカーゾーン」のひろがるまち

橋本晋輔

都市・地域プランニンググループ



「ぶらり」が楽しいまちというところのようなイメージを持つでしょうか。歴史的なまちなみ、小さなおしゃれな店舗が点在するまち……。そのようなまちと対局的なイメージなのがニュータウンではないでしょうか。

大阪市住之江区にある南港ポータタウンも計画的に整備されたニュータウンの一つです。ただ、他のニュータウンと大きく違うところは、「ノーカーゾーン」という制度を1970年代のまちづくり当初から導入しており、自動車の進入が禁止された1キロメートル四方のエリアがあることです。

海外では、ドイツやフランスなどヨーロッパ諸国を中心に歩行者中心のまちづくりが進められ、住宅団地でも自動車の進入を禁止しているエリアがありますが、国内の住宅地でこれだけの規模で自動車進入禁止にしているのは非常に珍しいケースです。

■「ノーカーゾーン」により得られる豊かな空間

南港ポータタウンの住民の駐車場はニュータウンの外縁部にあり、自宅から自動車に乗るには駐車場まで徒歩や自転車で行く必要があります。許可を得れば自動車をノーカーゾーンの中に入れることはできませんが、住宅のすぐ側に駐車場がある一般的な住宅団地に比べると自動車利用は不便です。ただ、その分まちの中には駐車場がなく、豊かな公共空間、緑地空間が広がり、とても大阪市内とは思えない風景が広がっています。また、このまちにいて感じるのは、歩いている人が多いことや住民同士のつながりが強いことです。人口約23千人、230人／ヘクタールの高密な住宅地であり、かつ一般市街地に比べると閉鎖的なニュータウンという特性もありますが、平日昼間でも歩いている人が多く、駅前広場などで立ち



話をしている人をよく見かけます。このような特徴をPRしようと、住民らで構成するまちづくり組織（咲くまちPT）が中心となり、これまで動画、ホームページの作成やイベントなどを行ってきました（詳しくはニュースレター197号参照）。

■不便さの先にどのようなまちがあるのか？

「自動車というパーソナルな交通手段を規制する」、すなわち個人個人がある程度の不便さを受け入れることと引き換えに、他の地域にない魅力を得て暮らしを豊かにする。これは、最近国内各地で

も行われてきている道路空間の再配分など、歩行者中心のまちづくりの動きとも重なります。それだけが不便さを受け入れ、それを続けていくことは難しいことです。が、その不便さの先にどのようなまちの姿があり、暮らしがあるのかを共有していくことが本当の意味での豊かなまちづくりにつながると思います。

今後、南港ポータタウンで「ぶらり」の楽しさをさらに高めていくためには、豊かな公共空間、緑地空間の活用を進めていくことが必要です。先日、緑道を活用して、手作りをテーマにした「ナンコウDIYマーケット」が開催されましたが、このような動きがまちの更なる魅力向上につながると感じています。



「草津川跡地公園」と公園内の集客施設 「草津ココリバ」がオープンしました

三木健治
地域再生デザイングループ



草津川跡地公園は、市街地を貫く緑軸となる公園で、将来的には、市街地から琵琶湖まで、延長約6キロメートルにわたる全国に類を見ない細長い公園となります。

今回は、市が所管する全5区間のうち、先行事業として市街地部の『de愛ひろば』（0.9キロメートル）と、琵琶湖に近い『ai彩ひろば』（1.2キロメートル）の2区間が整備されました。

■都市価値を高める廃川活用

市街地部を東西に貫流し琵琶湖に注いでいた旧草津川は、2002年の草津川放水路の開削により廃川となりました。

廃川敷については、道路として活用するか、まちのにぎわい空間として活用するか、市民を巻き込んだ議論が行われました。2012年に都市価値を高め、未



来に新しいチャンスを広げるまちづくり資源として捉え、「人と人の交流」をテーマとした公園として整備する方針が決定されました。

このコンセプトに基づき、市街地の中に、天井川の凹型の空間を活かした広大な公園が整備されました。

■市民、事業者、行政の協働による公園マネジメント

広大な公園が整備される一方、「どのようにして高質な環境を維持管理運営するか」、また、「どのようにして公園の集客力を高めるか」が大きな課題となっていました。そこで、基本計画策定段階から、市民活動や緑地管理を担う市民グループを組織化するとともに、公園内に民間事業者による集客施設の整備を行うこととしました。また、住民・事業者・市民活動団体

等が参加する「草津川跡地管理運営会議」が設立され、活動やイベントの相互調整・相互連携を行うことで、多くの人でにぎわう公園づくりが進められています。

■中心市街地活性化事業との相乗効果

今回整備された『de愛ひろば』は、草津市の中心市街地に位置します。JR草津駅を中心とする中心市街地には、旧街道の東海道と中山道が分岐する草津宿があり、利便性と歴史性の高い地域ですが、郊外店舗の立地などに伴い、その低迷が懸念されていました。こうした状況から、2013年に草津川跡地公園の整備を起爆剤とする中心市街地活性化基本計画の策定も併せて行われました。

計画策定とともに設立された「草津まちづくり株式会社」は、これまでに駅前未利用地への商業施設の整備、空き店舗活用による店舗誘致を行いました。本公園では草津市から都市公園法第5条にもとづく許可を受け、公園用地の一部で集客施設の整備を行うとともに、公園にふさわしいテナント事業者のリーシングを行いました。

集客施設は、宿場町であった歴史性や、広がりのある公園の中でランドマークともなるよう、大屋根を持つ寄棟の建物としていま



す。また、店舗と公園を一体的に機能させるため、全棟にテラスを併設しています。こうしたコンセプトを踏まえたイタリアンレストランとピッツェリアカフェ、ホットヨガスタジオの3店舗がオープンしました。これら店舗は、公園利用者へのホスピタリティの向上や、公園内でのヨガイベントやオープンカフェなどの公園空間の積極的活用が期待されています。

お近くにお越しの際には、ぜひりと訪れてみてください。

■さらなる公園の延長

今回、2区間が共用開始となりましたが、今後、さらに延長される予定です。整備された区間では、これまでは無かった集客が生まれています。今後の公園の延長によりまちの動線が大きく変化していくことを期待しています。

※本業務は三木、堂本が担当しています。

目指せ！「関西インバウンド大賞」

高野隆嗣：

地域産業イノベーショングループ



関西圏における外国人受入の優れた取組を顕彰する「はなやかKANSAI魅力アップアワード」が創設され、初の「関西インバウンド大賞」が発表されました。

観光客は元より、ビジネスや留学等に係る外国人の受入に際して、関西の強みや課題について共有・議論するため、関係機関による「はなやかKANSAI魅力アップフォーラム」が設置されています。平成27年度より弊社では、近畿経済産業局から委託を受け、同フォーラム関連の調査をお手伝いしています。この度その一環として、「はなやかKANSAI魅力アップアワード（以下、アワード）」の創設に関わる機会を頂きました。

このアワードは、観光・ビジネスから学び・生活支援まで広範な分野を対象に、外国人の受入環境整備に係る優良事例を広く募集しています。有識者による評価基準策定委員会、

エントリー事例の訪問、外国人留学生によるWG、有識者による優良事例検討委員会（委員長・廣岡裕一先生）などを実施しました。

初回となる平成28年度のエントリーは、多彩な顔ぶれでした。大賞は、京都市内で訪日外国人旅行者向けに文化体験を提供する有限会社ワックジャパンです。創業から約20年に渡り、地域の文化や社会に密着した運営を行っています。

このほか、ゲストハウス運営の株式会社Feed Japan（京都市）、お寿司体験を提供する株式会社梅守本店（奈良市）、能の英語公演等を行う公益財団法人山本能楽堂（大阪市）、言語に依存しない食の成分表示のためのピクトグラムを提供する株式会社フードピクト（神戸市）が特別賞を受賞しました。

このアワードは、次年度以降も継続される見込みです。詳細は近畿経済産業局のHPに掲載される予定ですので、興味のある方は是非とも挑戦してください。

※本業務は、地域産業イノベーショングループの高野、釜下、高田、江藤、益山が担当しました。

多機能型障がい福祉サービス事業所「若杉」・グループホーム「あんず若杉」がオープンしました

山崎博央：

建築プランニング・デザイングループ



知的障がい者生活介護事業所「京都市若杉学園」の民設民営による再整備が行われ、アルバックは施設全体の設計監理を行いました。

事業実施法人は社会福祉法人京都ライフサポート協会で、アルバックとは「横手通り43番地庵」の設計監理から15年以上のお付き合いになります。今回は事業法人としての応募の段階から建築計画のアドバイザーとして係わりました。

「若杉」は生活介護、就労継続支援、相談事業など利用者の包括的な支援ができる多機能型事業所です。作業室を「作業スペース」「休憩コーナー」「男女別専用トイレ」で構成されたパッケージとし、利用者が集中

して作業に取り組む環境を作ったことが特徴です。作業室間をブラインド内蔵の二重窓で仕切り、施設全体に視線が通るようにすることで支援者の連携がとりやすい形としています。

道路に面した大きなスクリーンは、近隣、利用者双方にとつて、プライバシーを守るためだけでなく、不安をとりのぞき、落ち着いた生活を保つための仕掛けでもあります。

「あんず若杉」は知的障がいの方のためのグループホームで、10名の定員に加え4名の短期入所も受入可能な事業所です。大きな屋根をかぶせた建物は「みんなで暮らす家」を意識した形としました。

趣向を凝らした庭、敷地に残した樹齢50年を超える大きな桜の木、建物を取り巻くゆとりのある屋外空間が、込み合ったまのポリウムに対して安らぎのスポットとなっています。

事業所の一面に設けた販売コーナーではお弁当やケーキを販売しており、人気商品は売り切れになることもしばしば。お近くを通られる際には是非、足を運んでみてください。

「パンとケーキの店・あんじゅ」（京都市南区東九条下殿田町24）

※詳細は、弊社ホームページに掲載しています。



国内初、竹チップバイオマスボイラーが 本格稼働を開始しました

中川貴美子：

サスティナビリティマネジメントグループ



竣工式の様子



バイオマスボイラーと竹チップ

当社は、基本設計および設計施工業者を決定するためのプロポーザル実施・審査支援、技術監理支援を行いました。

近年、温浴施設等の熱需要が消費ある施設のボイラー更新時期に、木質バイオマスボイラーに転換する例があります。が、「竹」を主として本格的にボイラーとして活用する今回の設備は、おそらく全国初の導入となります。

洲本市に限らず、各地の竹林は、衛生産、竹炭や建材等に活用される循環システムのひとつでしたが、時代の流れにより放置竹林が増え、有害鳥獣のすみかとなっていることから、経済的に活用できる仕組みをつ

洲本市「ウェルネスパーク五色ゆらゆらファイブ」に竹チップの燃料を主とするバイオマスボイラーが導入（設計施工：（株）ヒラカワ）され、4月5日に竣工式が行われました。

くることが全国的に、急務の課題となっています。これまでも、竹を燃焼すると、ガラス状の灰が固着（クリンカの発生）することが技術的な課題でしたが、連続燃焼試験をメーカーと協力し実施し、クリンカの発生しにくい竹の燃焼方法を確立、今回の実用化につながりました。計画では、竹林面積4〜5ヘクタールに相当する年間140〜180トンの竹チップを使用する予定です。また、本ボイラーは、災害時の停電時にもお湯を供給できるようなシステムとなっています。

バイオマス利用は化石燃料ボイラーとは異なり、導入してから約1年間はモニタリングし、使い手も使いこなしていく必要があります。導入して終わりではなく、まずは、この1年間、どんな運用がされていくのか見守っていきます。

※本業務はサスティナビリティマネジメントグループの畑中、谷測が担当しました。

町内からファンづくり！ 地元スーパーと連携した特産品の試食販売会

佐用町の特産品カタログはこちら →



武藤健司：

地域産業イノベーショングループ



みなさんは、お世話になった方に手土産やギフトを贈る場合、どのような視点で選びますか。センスも問われるシチュエーションです。

私は、相手の好みをイメージし、自分では買わないけど、貰って嬉しい、こだわりや特別感がある商品を選びたいと思います。地域と商品の両方の魅力を語れる特産品なんか最適ですね。

昨年度、兵庫県佐用町で特産品のブラッシュアップ（個別支援）、販路開拓に向けた展示商談会（アグリフードROD大阪）への出展、佐用町の特産品を示すブランドネーム「佐用風土」の構築・PR支援などをサポートしました。販路開拓には、町民からまず認知され、応援をもらう動きが必要であり、それらを目的とした地元での試食販売会を3月に開催しました。

地域の特産品を地域で販売・PRする取組は、多くの自治体で実施されています。しかし、「集客が見込めない」、「参加者が特定の層に限定される」、「予算が切れて一過性になる（定着しない）」などの課題があり、成功例が少ないのが現状です。佐用町では、これらの課題を見据えて企画を検討し、地元で集客力があるマックスバリュ佐用店にアプローチしたところ、「地域貢献、地域連携事業を重視しており、ぜひ協力したい」とご快諾いただき、連携が実現しました。マックスバリュ佐用店からは、場所の提供だけでなく、新聞の折込広告や店頭での事前PR、購入者への景品提供など、多大なご支援をいただき、より効果的な販売・PRができました。

住民へのまちの魅力発信ニーズが高まる中で、町単独の開催ではなく、地元事業者と連携した今回の取組は、行政・地元スーパー・出展者・来場者のそれぞれにとってWin-Winの関係となり、新しいモデルになるかもしれません。佐用町が誇る特産品。家庭用に、ギフト用にいかがでしょうか？

＊本業務は、地域産業イノベーショングループの原田弘之も担当しています。



当日の様子

都市農業は近くにいる消費者に農産物を直接プロモーションできます！

鉄道拠点駅でのマルシェ × 沿線の地元での農業体験

原田弘之：

地域産業イノベーショングループ

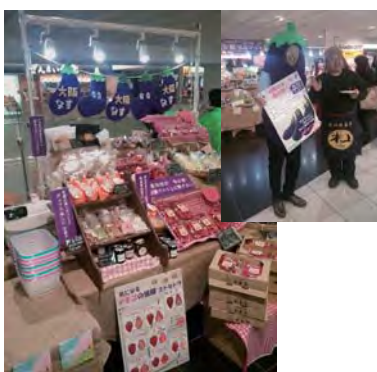
「富田林の大阪なすは春が旬！今夜のおかずにかがですか？」をうたい文句に、3月末に大阪の南海難波駅で開催された「沿線マルシェ」（主催：南海電鉄）に出店しました。

南海難波駅は大阪の泉州地域や、富田林を含む南河内地域の住民の利用者が多く、産地を身近に感じる人も多いと考えられます。そうした中で、できるだけ多くの方に「富田林の大阪なす」を知ってもらうために、なすの被り物を使って、生産者の子供も一緒にPRしました。

さて、一方で富田林のなす産地でも、同じく3月下旬に親子を対象に、「富田林の特産品『大阪なす』の食農体験ピクニック——なすびマンと一緒に、大阪なすの収穫とピザづくり——」を開催しました。若手農家集団やキッチンカーの事業者と協力して、焼きなす、なすジュースづくり、なすの袋詰めとシール貼り体験なども行い、なす嫌いの子どもたちからも好評でした。

都市農業は、地方部の大型産地と比べて規模や量では負けてしまします。そこで、すぐそばにいる多くの消費者に直接訴求することが武器になります。その取組の1つがマルシェや農業

鉄道拠点駅でのマルシェ



沿線の地元での農業体験



体験です。さらに電鉄会社と連携して広報や移動の面で効果的な企画にするなど、今後いろいろな展開のしようがあるのではないのでしょうか。

＊上記の取組は富田林市からの受託業務で、原田、渡邊、武藤、片山が担当しました。

今後の郊外部のまちのあり方を考える

山崎将也：

都市・地域プランニンググループ

十年来、集約型都市構造への転換がうたわれ、様々な施策が整備されてきています。

集約型都市構造への転換に向けた施策は、まちなかに人や機能をいかに集めるか、という観点のものが大半で、これまで都市の郊外部をどうするか具体的な検討は十分にはされてきませんでした。

そのような中で、平成26年の立地適正化計画の制度化などを機に、国において郊外部のあり方が検討されるようになってきており、その一環として全国の自治体に対してアンケートやヒアリングを行い、郊外市街地の抱える課題や対応策について把握しました。

郊外部といっても、区画整理により整備されたまち、古くからの農村集落など、それぞれに成り立ちや環境が大きく異なりますが、多くの地域で、高齢化、生活関連施設・公共交通利便性の確保、空き家・空き地の増加が課題として挙げられていました。

その中で、郊外部をいくつかの地域に分類してきめ細かに対応している、あるいは郊外部の中でも人や機能を集めるところを定めメリハリのある対応を行うなど、様々な工夫をこらしている自治体がありました。その一方で、多くの自治体では、高齢化や生活利便性の維持などの

課題に対する効果的な対策がなく、苦勞している状況が浮き彫りになりました。

アンケート等を踏まえて、今後の郊外市街地のあり方についてケーススタディによる即地的な検討も実施しました。まちの機能を維持するために規模を縮小する、あるいは分散する市街地を一つに集約する、また増加する空地进行市街地の環境改善のために活用するなど、それぞれの地区の状況に応じた対応策やそのための実現化手法について提案しましたが、これらについては、引き続き国において検討が進められていく予定です。

一連の調査を通じて、地域のことを良く理解した上でそれぞれの地域にに応じて最適な方法を考えなければならぬという、まちづくりの基本を再認識しました。

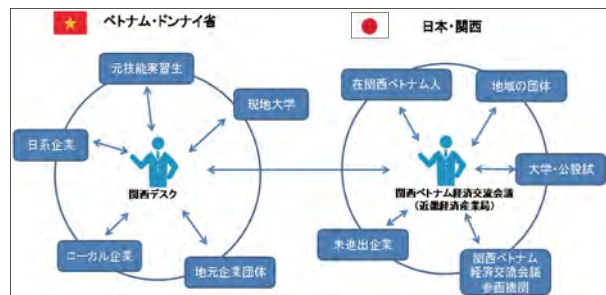


更新されないままに拡大していく郊外住宅地の例

ベトナムにおける裾野産業を元気にするために

高野隆嗣：

地域産業イノベーショングループ



しかしながら、未だにベトナムの「裾野産業」が脆弱なことから、日系企業における部材の現地調達率が低迷しており、ローカル企業や台湾系・韓国系など第三国企業等に係る情報収集すらないのが実情です。また、現地従

製造業を中心に数千社が関西からベトナムに進出していると言われています。

ベトナムとの取引・進出ニーズの高まりを受けて、関係機関による「関西ベトナム経済交流会議」が設置されており（事務局・近畿経済産業局）、ベトナム商工省やホーチミン市・ドンナイ省と「経済発展促進にかかる協力文書」を締結するなど、現地の投資環境改善に向けた取組が推進されています。日本の技術協力を得て、ベトナム側も自国の裾野産業及び人材の高度化、グローバル・サプライチェーンの生産拠点を構築するなど、Win-Winの関係づくりが図られています。

業員の確保・育成も問題となっています。本邦への留学生や技術実習生が急増する中、日本の中小企業の進出と現地企業の発展に寄与する人づくりが課題になっています。

今回は、ベトナムに進出している日系企業、現地ローカル企業・第三国企業、現地送出機関、国内の受入機関、更には国内外の大学など、多岐に渡る調査を行う機会を得ました。また、学識経験者や企業経営者による研究会（座長・仲上健一先生）を通じて、裾野産業の脆弱性及び産業人材の確保・育成に係る課題等を明らかにし、日本企業の更なる進出や、進出済み企業の事業拡大に寄与するための課題を考察しました。更に、関西とベトナム・ドンナイ省の双方で、基盤技術を持つものづくり中小企業・大学・支援機関等によるネットワーク「日越サポインネット」形成に向けた施策も取りまとめています（詳細は近畿経済産業局HP参照 http://www.kansai.meti.go.jp/2kokujiglobal_PT/vietnamreport2016.html）。

今後も引き続き日越のものづくり産業の交流・双発にお役に立ちたいと考えています。
※本業務は、地域産業イノベーショングループの高野、高田、貴船、山部が担当しています。

その21 地域に寄り添って地方創生を考える

医療など多様な都市機能の集積で成長する南風原町

※詳細は、弊社ホームページに掲載しています。（<http://www.arpak.co.jp/newsletter/203/12.html>）



森脇宏：

代表取締役社長

今号では、ここ数回紹介してきたような企業誘致ではなく、別のタイプで成長してきた市町村として、沖縄県の南風原町（はなづかる）を対象とし、考察を深めます。

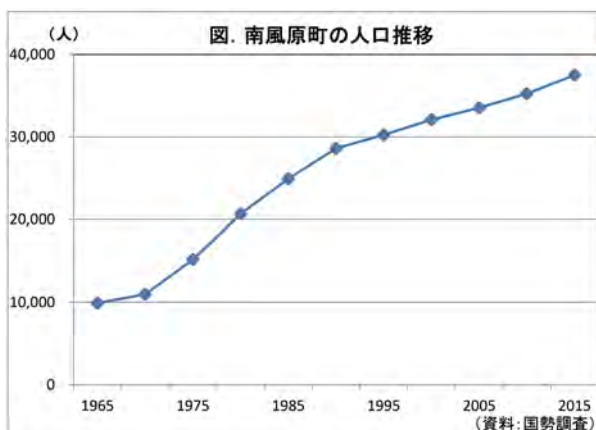
■人口も流入者数も増加

南風原町の人口推移を下図にみると、増加傾向が続いています。

また、国勢調査で通勤通学流動をみると、南風原町に常住する就業者・通学者の65パーセントが町外に通勤通学で流出し、その多くが那覇市に流出していますので、那覇市のベッドタウン的な性格が強いと言えます。一方、南風原町に従業・通学している方の60パーセントが町外から流入していますので、単なるベッドタウンではなく、町外からも従業・通学者を引きつける吸引力も持っています。こうして、昼夜間人口比率が96パーセントと、自立性の高い指標を示しています。

■医療産業等の貢献

どうして南風原町は町外から従業・通学者を吸引できているのでしょうか。南風原町の就業者の産業別構成比（従業地ベース）をみると、沖縄県や全国と比べて「医療、福祉」



が22パーセントと極めて高くなっています。これらを担う形で、比較的規模の大きな6つの医療機関が集積しています。那覇都市圏において、医療という都市機能を担う地域として、南風原町が発展してきたとみることができます。

また、医療機関だけでなく、大規模ショッピングセンターや、協同組合による印刷団地、（人口3万数千人の町ながら）県立高校2校の立地、特徴的な娯楽施設等、多様な事業所の立地も吸引力を補完しています。すなわち、那覇都市圏の中で、独自の都市機能の集積を図っているのが成功要因と捉えることができます。

新人紹介

肉食系・草食系ではなく雑食系に！



駒和磨
サスティナビリティマネジメントグループ

奈 良生まれ奈良育ちの大和男児です。そろそろ、家を出ると親から言われる日々にくくくしています。

大学は、生物多様性、生態学、農業などを学び、卒業論文はため池底泥の農地への有効利用をテーマにしております。また、大学の課外活動では、野菜づくり、里山整備、小学校での環境教育の講師などもしていました。大学生活の4年間を山で過ごしていたので、久しぶりの都会に悪戦苦闘しております…

仕事で関わっていく地域は、産業や地理課題、住民の方々のキャラクターも十人十色だと思っています。そのためにも、これまでの経験・知識を総動員するのはもちろん、多角的な視野を持てるように興味の幅は雑食系でがんばりたいと思います。皆様、これからよろしく願いいたします。

私

は静岡県浜松市の出身で、大学入学後は6年間京都で過ごしていました。学部生の間は勉強よりもバレーボールに明け暮れていましたが、大学院ではそれなりに忙しく、学校に幽閉されて研究室のプロジェクトや自分の研究に明け暮れていました。それなりに充実した学生生活だったのかな、と思います。大学生活を通して様々な出来事を経験する中で、考えは紆余曲折して、自分はどうなことがしたいのか、社会に対してどんなアプローチができるのか、まだまだ混沌としている状態です。

日々の業務や議論の中で、脳みそを捏ね練り回して、自分が何者でありたいかを日々探求していきたいと思っています。

ちなみに私生活の今年度前半期の目標は、めだかの繁殖に成功すること、「お弁当マスター」になることです。皆さまどうぞよろしく願い致します。

お弁当マスターに



竹内和巳
地域再生デザイングループ

何事にもアグレッシブに



丸井和彦
公共マネジメントグループ

名

古屋出身で、進学を機に始まった大阪での生活も7年目に突入り、ようやく関西に馴染めてきた気がします。

大学・大学院では一貫して災害について学び、その中でも復興政策に焦点を当てて研究していました。被災地に幾度となく足を運び、現地に赴くことの大切さを、身をもって感じました。

もともと旅行が好きですが、最近では「ダークツーリズム」に関心があります。それは、人々が悲惨な出来事の悲しみや苦しみを、どのように乗り越えてきたかという点に興味があるからです。これまでにチェルノブイリ原発やアウシュビッツ、ハンセン病療養施設である長島愛生園などを訪れました。

人々の地域に対する思いをしっかりとくみ取って、持ち前のフットワークの軽さを活かしながら「持続可能な地域づくり」への貢献ができるように頑張ります。どうぞよろしく願いいたします。

奈

良県出身で、趣味は旅行と史跡巡りです。高校生の時に地域課題や観光について学ぶコースに所属しており、発掘調査のアルバイトや観光案内のボランティアに取り組みました。大学生活の6年間は観光学を専攻しており、研究会やフィールドワークなどを通じて、観光は様々な特性を持ち、課題解決のツールとして活用されていることを学びました。その中で、関心の高かった伝統産業産地の持続のために、観光がどのような役割を果たすのかをテーマに研究し、ビジネスコンテスト等を通じて発表してきました。

これまでは、地域の課題解決のツールとして観光が武器となると考えておりました。今後はコンサルタントとして自身が地域や企業の課題解決の武器になりたいと思っています。刃物で例えれば、今は果物ナイフほどですが鍛冶職人である先輩方に研磨して頂き、日々勉強をモットーに自分の個性も磨き、「政宗」のような切れ味の鋭いコンサルタントになれるよう精進していく所存です。どうぞ、よろしく願いいたします。

名刀「政宗」を目指して



水野巧基
地域産業イノベーショングループ

近況 & イベントのお知らせ

ホーチミン市にサテライトオフィスを開設しました。

堀口浩司

取締役副社長（東京事務所長兼務）

ベトナムは人口約 9,400 万人、平均年齢は 30 歳以下と若い国です。近年は経済成長も著しく、この国に進出する日系企業が増えています。最近はものづくり企業のみならず、農業法人やサービス業など、ASEAN 全域での経済発展と中間所得層の充実に着目した企業進出が盛んです。2018 年にはベトナムやミャンマーなど AEC（ASEAN 経済共同体）に遅れて参加した国の域内関税がなくなり、タイ、マレーシア、インドネシアなどの先発組とも製品やサービス業分野での往来が盛んになると考えられています。

当社では昨年ベトナムにおけるものづくり産業の裾野分野の充実や技能実習生の活用などについて、日系およびローカル企業を対象とした調査を行いました。その際の経験から現地での調査活動拠点として、今年 4 月からオフィスを確保し、駐在員事務所を設立する運びとなりました。出資法の制約もあり、現地での受注活動はできませんが、日本の企業や自治体が進める人的交流や地場産品の販路拡大など調査や支援活動を行うための現地人材も確保し体制を整えつつあります。

我々と連携する現地関係者として、日本からの企業進出やベトナムへの誘致支援を行う会社を起業したコプロナ社（アン社長）やすでに現地に進出し営業活動を進めている協同組合マス

ターズの方などの協力も得て、当社のスタッフが現地で活躍できるよう基盤整備を進めています。

現地でのコンサルタント事業は、社会主義国でもあるので「ベトナムのための、ベトナム人による、ベトナムのシンクタンク・コンサルタント会社」が必要になってくる筈です。したがって、当面、我々は本邦企業や自治体に対する支援業務が中心になると考えています。更に当社のスタッフには、直接にベトナムの案件に関わらなくとも閉塞感のある日本国内から一歩外にでて、新たな視点で国内外の政策やプロジェクトを見直すきっかけになることを期待しています。

ベトナムは製造業分野だけでなく、農業を中心にした地域開発、環境・エネルギー対策、インフラの整備など大きな可能性を持っています。我々のオフィスはホーチミン市のレタントン通りという「日本人街」とも言うべき地区にあります。これから市場開拓や生産の場としての進出をさまざまな形で支援したいと思います。これからの活動に注目してください。



隈研吾氏「メインストリートの未来」を語る！

ミナミ御堂筋の会シンポジウムを開催

絹原一寛：

都市・地域プランニンググループ

2 月 24 日、世界でご活躍の日本を代表する建築家、隈研吾氏を招いたシンポジウムを開催しました。アルパックが運営支援する、ミナミ御堂筋の沿道企業からなる「ミナミ御堂筋の会」の主催です。

世界中でメインストリートが競いあう時代、人間がまちを作る感覚を空間としてどう実現するか。質感や場所の個性、表と裏の連続性、機能の複合性など、ご自身が手がけられた建築から着想を得たメインストリート、ミナミ御堂筋のあるべき姿について、示唆に富むご提言をいくつも頂戴しました。

ミナミ御堂筋の会では、今年、大阪市等で推進する

御堂筋 80 周年記念事業とリンクしながら、100 年後も見据えたメインストリートのあり方を発信していきます。ご期待下さい。





向島城の痕跡をさがす

大河内雅司：
地域再生デザイングループ

みんなで作った京都市の向島ニュータウンまちづくりビジョン。向島で新しいまちづくりが始まりました。

昨年度、「向島ニュータウンまちづくりビジョン」の策定をお手伝いしました。住民や事業者、行政など、たくさんの人たちの参加によって、「暮らし心地を誇れる」多文化・多世代共生の「まち」を将来像に掲げて、新たなまちづくりがスタートしています。

■まち歩きで新しい向島のイメージを発信しよう



近鉄京都線瀬川橋梁

ビジョンづくりにおいて、歴史文化・多文化共生にかかる取組を提案したメンバーは、「向島城などの歴史資源は知られていない。まち歩きでそれらを掘り起こして新しい向島のイメージを発信しよう」と考えました。プラタモリ（京都・伏見編、2016.5.7）や京都高低差崖会（向島城フィールドワーク、2014.12.12）でもこの地域が取り上げられており、来訪者が増えていることも追い風になりました。

桜が開花してツバメが帰ってきた4月2日の日曜日、「向島城跡をめぐるまち歩き」の社会実験に17名が参加しました。

■見所は近鉄京都線瀬川橋梁、小倉堤、向島城など

まち歩きのモデルルートは、京阪観月橋駅を起点に、豊後橋→近鉄京都線瀬川橋梁→小倉堤→向島本丸跡といった歴史資源をめぐる、向島ニュータウンの桜並木でお花見→巨椋池の田園景観を楽しむ、野菜マルシェが開催されている種智院大学でゴールしました。

見所のいくつかを紹介すると、近鉄京都線瀬川橋梁は、国の登録有形文化財に指定された日本最長の鉄橋で、近代日本の産業遺構、戦争遺構と言われています。小倉堤は、秀吉が築かせた伏見と奈良を結ぶ街道堤防であり、古い民家や商家が残って

います。向島城の本丸、二ノ丸、三ノ丸の推定場所では、「向島本丸町」、「二ノ丸町」といった地名が今でも使われており、島状に地形の高低差が発見できるなど、向島城の痕跡を確かめることができました。

■まち歩きの一歩から始まる新たなまちづくり

まち歩きを企画したメンバーは、ルートの見直しを行うとともに、助成金を活用してマップづくりを考えられています。歴史資源を掘り起こすまち歩きからスタートして、農や自然環境、景観を楽しむツーリズムに育てていくことで、新しい向島のアピールをめざしています。小さなキックオフの一歩が、向島ニュータウンの新たなまちづくりの第一歩になりますように。

※アルパックは今年度も、ビジョン実現に向けた取組の立ち上げを応援します。



向島城の痕跡と思われる高低差



「レターズ アルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates・Kyoto
<http://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四條通り高倉西入立売西町82 TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦1-19-24名古屋第一ビル6F TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南3-5-11スクエア九段ビル1F TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221

九州事務所 〒810-0802 (株)よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8福岡パールビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。